

1872

# 亞細亞之光輝

第壹卷

興教書院

博士エドワード・アーノルド氏著  
樞密院顧問官島尾小彌太君題字  
赤松連城君校閱

中川太郎譯

フ



特47

299

博士エドワード・アール・ド・氏著

農學士中川太郎 譯

# 亞細亞之光輝

第壹卷

興教書院



No 23543 / 23







**Sir EDWIN ARNOLD,**

像肖氏ドルノーアン#ウドエ



サ、エドゥキ、アーノルド氏の略傳

第十九世紀に住む處の學者は梵語が何故も百年前まで世に知られざりしやと疑ふからん、されども百年前までの曾て之を修めしもの無かりしなり、彼の賢明ある大家が梵語學の緊要を先見したるは、實に前世紀の最末にして英國と印度の交渉密なるの時代は在り、當時歐洲の學者は、早くも梵學が大學校の科程とありて、青年學者の教育に於て緊要ある部分を形成せんことを豫め察せしものも多かりき、而して一たびかゝる梵學上の刺戟を學者の腦裡に入ると否や、學者は好んで斯學に従事し、遍く印度の文學者も就き、曾て修し難く思惟せる梵學上の困難を悉く掃盡したり、夫より漸次は右梵學の思想を移し來り、其高尚ある文學は遍く歐洲の學者に傳はりたり。

我々は今、エドゥキ、アーノルド氏の略傳を草せんと欲するに當り、



(二)

更に梵學傳來の鼻祖たる人々の紀念を示さざるへからず、ウヰルキ  
ンス、シヨンス、ウヰルソン、プリンセプス、ホートン、ロソンの諸大家は、  
皆アーノルド氏の前に在りて、已に梵學を修得せし人々なり、此等の  
諸氏は最も早く、印度學路の荆棘を開きたる開拓者にして、現に我々  
は其力に依て人跡絶たる思想の境に達するの新路を發見したるも  
のど謂べし、サー、エドウヰン、アーノルド氏ハ此等の人々の足跡を履  
み、進んで過去數千年間疊積したる無盡の金礦を發見したるものな  
り、氏はかゝる無價の鑛脈に入りし以來、非常の熱心を以て休みなく  
寶玉を發掘し、多くの鑛璞を光明世界に持來りたる末、多年選擇し收  
獲したる東洋文學の光輝を廣く世界に顯示するの期に達したり。  
英國の審判官にして、サセツキス州フラムフィールドに住みたる、ロバ  
ルト、コールズ、アーノルド氏ハ二人の非凡なる子を有せり、一をアー

(三)

サー、アーノルドと云ひ、身を政治界に顯はし、亦文學者の名を得たり、  
一は此傳の主あるエドウヰン、アーノルドにして、紀元一千八百三十  
二年六月十日に生れ、本年實ハ五十八年の春を送れり、彼れハ年少き  
頃より、夙く既に風采の見るべきものありて、將來の履歷に光彩を添  
ふるの事蹟多かりき、彼の小學日勤の進歩は常に頭角を露はし、中學  
及大學に於ても常に俊秀生に擧げられ、一千八百五十二年、年甫めて  
二十、牛津大學在學中、ベルンヤザイ饗宴の詩を詠し、ニユーダイグー  
トの優等懸賞を得、名聲同學中に噴々たり、其翌一千八百五十三年、有  
名なるダービー伯が牛津大學の議官チヤンセルに叙せられし時、撰ばれて同伯  
に對し祝賀の演説を爲せることあり、一千八百五十四年に於て、非常  
の秀穎を以て同大學と卒業し、マスター、オフ、アーツの學位を得たり、  
卒業後直ちにハーミングハムなる王、エドワード六世の學校に於て



(四)

英語部第二の教師と爲れり、されども教授職の如き無味なる事業は、かゝる秀才の青年を満足せしむるに足らず、次てアーナ府なる梵學大學の總長に任じ、兼てボムベイ大學の職員に補せられりと雖も、是とて充分の感情を満たす足らず、されども一の事情ありて彼れをして能く其地位に満足せしめたり、彼れは此地位に在りて、深く東洋の言語文學及諸般の知識を講究するの便を得たればなり、而して後來エドウヰンある大名を世に示すに至りたるは實に此年月の賜あり、かゝる多繁の年月に於ても彼の年若きアーノルド氏の威重、機敏、秀逸の風姿を以て、完全に其職務を果し、劇職の間に閑日月を送りたり、されば在職(凡五年)の間に參議院長ガバナー、オヴ、カウンシルの謝賞を受くること兩度に及べり、人皆其器量を讚美して曰、春秋尙富める才子の前途、我々は之を見んと欲するありと。

一千八百六十一年、氏の其職を辭し、眼を新聞事業に轉し、龍動府の大新聞デーリー、テレグラフの編輯局に入り、其間變幻極り無き小説文學に關する翻譯の論說、詞藻等凡て紙上の光彩を加ふるの說は多く、氏の手になり、他の新聞に超へて讀者を満足せしめたり、デーリー、テレグラフ新聞社がジョーシ、スミス氏を小亞細亞アツシリヤに派遣し、及米國紐育へレナルド新聞社と共にヘンリースタンレー氏を阿弗利加に特派し、遠く暗黒の内地に侵入せしめ、宣敎使リビングストンの搜索に従事するや、アーノルド氏は本社持主の爲め、其第一出陣の遠征隊を組織し、以て世の讚賞を博したることありき。

サー、エドウヰン、アーノルド氏は、多くの文學雜誌に寄書せる其間に於て、亞細亞の光輝の如き雄篇の著書を爲したり、此外グリセルダ(演劇脚本)ポエムス(詩篇)ヒロイ、エンド、リンドンダー(希臘詩の譯本)インデ

(五)



アン、ソング、オフ、ソングス、(印度ヤカバトギタ)インディアンアイザル  
 ス、ヒアルス、オフ、フェース、セ、シークレット、オフ、デウス、エンドウエル、  
 ヘロドータスのユータープ、タルハウシー伯の印度政史再探の印度  
 國等皆アーノルド氏の著譯を係れり。

アーノルド氏は最豊富なる文學者なり其天然の筆頭より流れ出つ  
 る處流暢美麗の新詩散文皆傳ふべきの佳篇なり且何れの學藝と雖  
 も氏が達し能はざるものなきが如く先づ氏は詩人の大家として世  
 の批評の外は卓絶し、記者として、歴史家として、演劇の作者として、批  
 評家として、哲學者として、皆世の喝采を博したり、而して更は希臘、印  
 度等、東洋文學の翻譯者として其名高し、中は於て梵語の轉譯は最幸  
 福なる愛遇を世に受けたり、其高妙なる趣味と其深奥なる藝能とは  
 一々語句の末に顯れ、毫も原文の奴隸と爲らず、而も嚴格はその粹處、

美處、秀處を寫來れり、實は氏の數千年の學者が容易に達し能はざる  
 自然の妙境は高歩し、獨得の妙手を以て靜かき天樂と奏しつゝある  
 ものなりと謂ふべし、我々は假令其人創造者非るも、一國の高き思  
 想の代表者として世に顯はれたるの大家は遍く全地球上の尊崇を  
 受くるの價値ありと信するなり。



## 亞細亞の光輝原序

此書は假りも熱心ある一信者の口に藉りて、彼の高尚なる俊傑、宗教の改革者にして而も佛教の開祖たる、印度の瞿曇王子の性質來歴を描寫し、又其教理の大要を示さんと欲するものあり。

今を距る數十年前の、歐洲人にして亞細亞に、此の一大宗教のあるを知るものは、殆んど無かりしかり、然れども、此教法たるや、實も二千四百年前より弘布し來り、之を奉ぜる人員の夥しきと、其弘通せる地方の廣大なるを、決して他教の企て及ぶ所には、あらざるあり、故に此王子の教理の中に生死する人員は、四億七千万人あり、其精神上の領地は、ヨーロッパ 錫蘭より全東半島に、及び日本、支那、西藏、中央亞細亞、サイベリヤ 等より、遠く瑞典のラブラド地方に、播及せり、而して印度に、此教義發生の原地たるを、拘らず、今は殆んど之を奉ぜる者あり。



さふ至りたれども、今日其國を行ける、ブラマ教中、王子の訓に係る、卓越する教義の痕跡と、歴然として掩ふべからず、而も、印度人の最も特異なる習慣と思想とは、正しく佛陀の寛仁ある教義に原因せるを以て、此地方も亦、佛教の版圖に属するといふも、敢て不可あかるべし、是に由て之を觀れば、世界の人類、三分一以上の道義宗教の觀念と、皆其源を此王子に發せしものといふべし。

抑も、王子の一身に關しては、其の傳記の甚だ不充分にして、詳に之を知るによしきといへども、思想の歴史中一人を除くの外、最も高尚なる、最も温和なる、最も神聖なる、最も慈悲なる人たりしは、敢て疑と容るべきあらず、其細事末節に至りては、諸書中各其説を異にし、訛傳謬説捏造のもの少からざれども、佛書中に聖人たるべき知力と、熱心ある信願と、王子たるべき威嚴とを兼有せる、純淨温和の美德を、毀

傷するが如き言行、一として記載せられざるの亦甚だ奇ならずや、佛教中、多くの點に關して全く誤解に陥りたる、パルセルミー、セント、ヒレイル氏すらも、尙釋尊に對して次の如く言へりとは、マクスミューラー教授の、よく引證する所なり、釋迦一身上に於て寸分の汚點なく、彼が非凡の行爲は其持論と相應せり、縱令ひ彼が、讚嘆する所の理論は誤謬あるにもせよ、彼が、一身の品行の端肅あるに至りては、毫も非議するところなきのみならず、彼の其自ら説く所の道徳を成就して、自ら其龜鑑とされり、即ち出家、發心、慈悲、柔軟等を、造次にも之を廢せ、六年間は、沈黙觀念して、以て世塵を避け、彼の教義と發見し、而して微妙の演音と確信の威力とを以て、之を五十餘年間に弘通せり、而して彼れが病を得て、諸弟子の看護に死せし時、即ち生涯の間、美事を行ひ眞理を發見したる、智恵湛然の圓寂と云ふあり、と瞿曇の世界



人心を制服せし事、此の如く夫れ大あり、是を以て其入涅槃の時に當り、余が位置に達するは、各人の能く企て得べき所なりと宣ひ、禮典と崇拜は、いたく擯斥せられたるにも拘はらず、後人報謝追慕の情に堪へず、其命に背きつゝも今日に至るまで、清淨ある廟前の香花は鬱として林をちし、南無歸依佛の語を稱念するもの、日に幾千百萬人あるを知らざるあり。

此書に掲けたる佛陀の實在せられしは疑ふへからざるの事實にして、耶蘇紀元前六百二十年の項、ニール ポル 國に降誕し、同五百四十三年の頃、ウインド の クシナガ に於て入滅し給ひぬと言ふ、されば年代の點より之を云へば、圓滿長久の大願と、無量無邊の大悲と、究竟妙樂の金剛信と、人間自由の大確説とを含有せる、崇敬すべき佛教、其ものに比して他教の甚だ幼稚なるは、固より論を待たざるなり、蓋し現今

の佛教中、大ひに其牀面を辱かしむべき、荒唐無稽の事項、混同するものは此れ畢竟、奥妙不可思議の教義を傳ふるの任に當れる人に乏しくして、凡僧の手中に墜ちたるに因るあり、抑も其根本教義の高遠にして且勢力あるは、其及ばす所の影響に由て判定すべきものにして、説明者の如何に因るものにはあらざるなり、况んや、宗徒即僧伽サンガに基ひして成形せし、怠慢虛禮的寺院の如何に依て、評決するを得べけんや。

凡そ東洋思想の骨髓を窺はんと欲せば、又宜しく、東洋流の眼と以て之を觀察せざる可らざる、是れ此詩篇は總て佛教者の口を假りて、之と陳述せる所以あり、若し然らざれば、記事を神聖ならしむる不可思議の事項と、其含有する理法とを描くよ、於て、決して其眞よ逼るの感想と喚起し得ざるべし、例へば轉生説の如き、當今の人、聞くもの皆一驚



を喫せざるものなかるべきも、此説たるや、遠く釋尊在世の時、確定して、當時の人は、皆之を信受して疑はざる所ありき、蓋し釋尊在世の時代との、チブチヤドチツザアのシエルサレムを取り、ミードス人のニニヅキーと滅さんとし、フオーンヤ人のマルサイユを開設せし時代あり、斯る舊教義の顛末と説明するより、儘不完全を免れざるのみならず、哲理上肝要と思はるゝ事、釋尊の在世に執られたる教化の事蹟をも、匆々、陳述し去て復掛念なきものゝ如きは、詩家の常態、亦已むを得ざる事あり、然れども、若し此書を読むものよして、王子の高邁ある性質と、其教義の大要とを會得するを得ば、我目的は既、達せりと云ふべし、但し書中引用する所は、多くスベンス、ハーチャー氏の書中より摘出し、而して世人の話柄、上れる項中、改竄を加へしもの一、二、止まらされば、學者中一大爭論と喚び起せり、されど、ニルヴァナ

〔<sup>(釋)</sup>ダルマ〕〔法〕〔<sup>(業)</sup>カルム〕等の如き、佛教中主要の項、關しては、頗る研究と積みたる定見あり、然り而して佛教の實意は、空滅即無物を以て、人間の最上地とあすに在りと云ふが如きは、頗る妄誕の解釋にして、斯る教義からんより、豈に能く世界人類を感化して、其三分一以上に達するの盛大を致すべけんやとは、余が固く執て動かさる所あり。

亞細亞の光輝(佛敎を云ふ)の宣布者(釋尊を云ふ)に歸命し、又彼れが紀念の爲、余が能くせる所の力を盡せし諸大學者、隨順して、其實假を乞はんと欲するは、余が匆卒の研究より、書中儘杜撰と免まざるの一事なり、然りといへども、匆忙寸假と得ざる少日數、於て、此書を編成せし所以は、東西の知識をして、益相通せしめんと欲するの一念、在ることなきば、此書並び余が著せる「インヂヤン、ソング、オヴ、ソングス」  
「インヂヤン、アイヤルス」等の如き著書によりて、印度國と愛し、又其國



(六十)

民を救恤したる人、即ち釋尊の紀念と永遠に傳ふるを得、本懐の至に堪へざるあり。

千八百八十四年八月

倫敦

エドウヰン・アーノルド 記す

亞細亞の光輝緒言

エドウヰン・アーノルト氏の蓋世の詩宗なり、其詩を讀む者誰か温雅適切の辞句に感じ流暢偉麗の語法に驚かざるものあらんや、況んや其性想像力に富み詩躰自ら婉曲にして而も宏壯の氣象に乏しからざるを以て、讀者として端なく其境に入り其物を見るの想あらしむるの氏が特よ長ずる所あり、然れん則殊俗異想の外人よして而も純精優美の國語よより能く東方印度の思想感情を寫出すること彼が如く、それ精妙あるの蓋し天稟の特能にあらずして何ぞや、實に氏の荊棘を薙り雜草を穿ちて空山赤嶺の間よ埋没せる金礦を採掘し來て歐米學者の市場よ齎出せしものと云ふへし、宜べなるか、其著書の學者社會に尊重せらるゝこと、殊よ亞細亞の光輝の歐米人をして佛敎の眞味を玩賞せしめたる著名の書あるを以て、實に歐米人之

(七十)



を尊重するのみならず、我國佛教者も亦其譯出を企望して止まざるなり、頃日社友某余に其譯を求む、余固より學淺く文拙なけれ、金玉を瓦石に變せし罪、決して追るべからざといへども、詩牀翻譯の困難なる文筆秀逸の士も尙且之を難んぜ、況んや匆卒の際原文の儘を寫出するの追あく往々其添竄を恣よせしものあるに於てをや、然りと  
いへども歐米人の佛教に對する感情の如何を知らしむるに於ては  
豈に少補する所あからんや、大方の識者幸に訂正教示の勞を吝むさ  
くんば幸甚と云爾。

明治廿三年二月

譯者 識

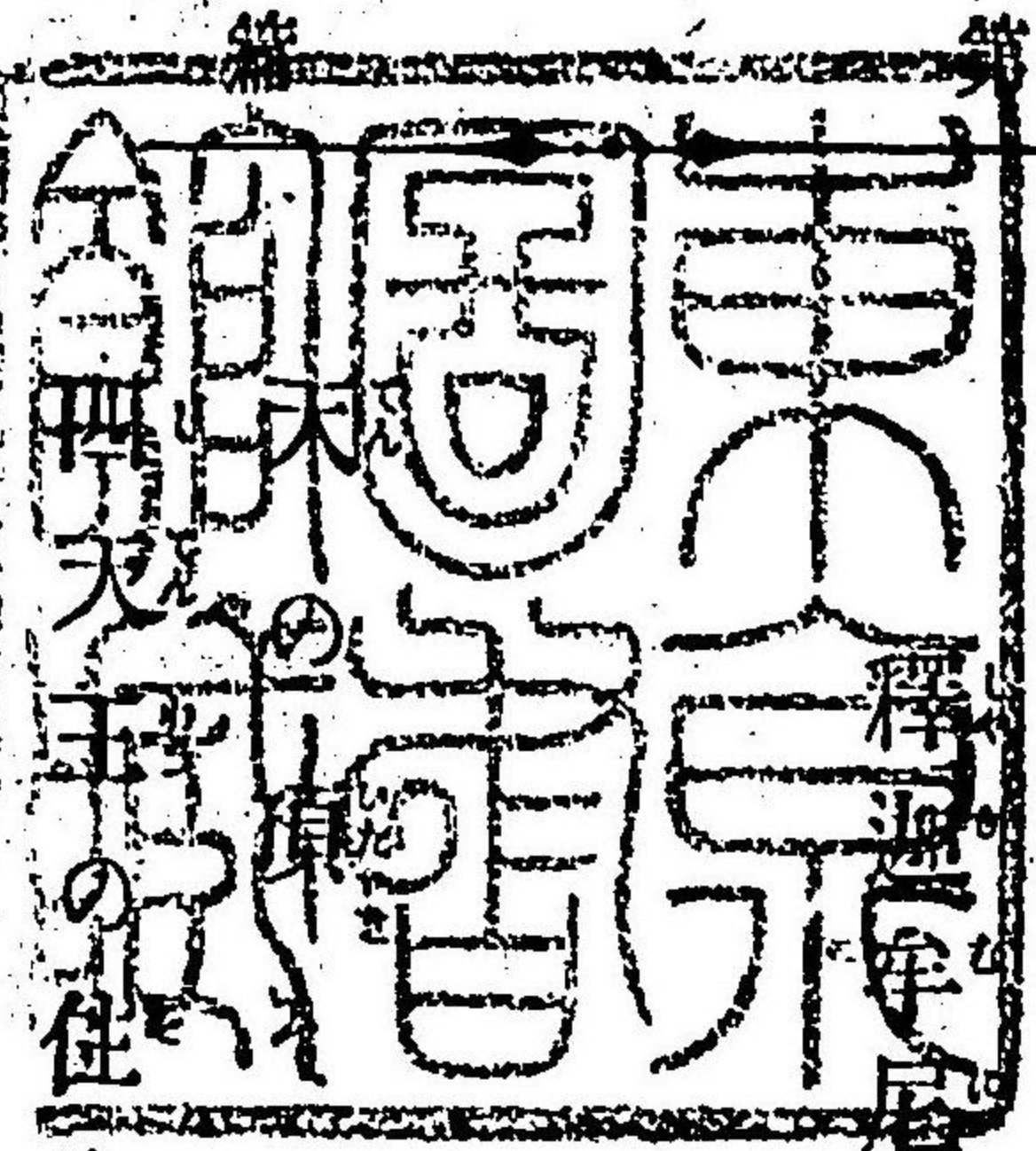
亞細亞の光輝 第一篇

世界の教主 大聖世尊 悉達太子 天上天下  
無比類なき 悲智圓滿なる 涅槃法教の主

釋迦牟尼佛の讚經。

英國博士 エドウヰン アーノルド 著

日本農學士 中川 太郎 譯



三萬年を経てし後 世界の支配つゝあると  
待つゝ住める處あり 近きとたりよ聖靈の  
ふたゝび生れいでんとて 佛陀と申しこよありける也



降誕あらんたしかなる  
 諸天を知りて語りけり  
 再たび降誕あるべしと  
 我今濟度よ降るべし  
 我れのみならず我法を  
 生死を離れ苦を終へん  
 ヒマラヤ山の南なる  
 信ある人の住居よて

其夜淨飯大王の

五つの祥を既よそや  
 佛陀を世界をすくふため  
 佛陀を之よ答へして  
 これたびくの終よて  
 學ばんものは悉く  
 さても降らんその土地を  
 釋種の中よあるべきぞ  
 正しき君の在ればなり

皇后なりける摩耶夫人

王の傍よまどろみて  
 六つの光線放ちつゝ  
 六牙の白象あらとしつ  
 虚空遙かよ降り來て  
 夢醒めて後摩耶夫人  
 何よ喩へんものもなく  
 愛でたき光り既よそや  
 海は静かよ音もなく  
 正午よ咲くべき花は皆  
 夫人の深き悦びは

奇しき夢をば見ありけり  
 赤く輝く明星を  
 右の脇よぞ入りよける  
 心の中の樂しきは  
 夜を尙未明けざるよ  
 地球の半ば照らしよき  
 山を笑めるも如くよて(山岳)  
 時を待あず開きたり  
 地心の下よも及びなん

註(カマツクの乳汁の如くに白き象なり)



長閑けき日かげ輝きて  
 四方に讚美の聲ありて  
 佛陀を下天したまへり  
 佛陀の教へを聞くべしと  
 リンボス全土平を得て  
 愛でたき氣もて充たしたり  
 語りたまへば頭には  
 占夢の博士白すやう  
 巨蟹の宮を太陽と  
 懷姪ありて王子とば

木の下蔭を照すとき  
 「生死も眠れる人々よ  
 望みの心ふり起あし  
 時よ天感地應あり  
 陸と海との隔てなく  
 夜明けて後よこの夢を  
 半ばハ雪を戴ける  
 「よは善き夢よれはすなり  
 交會なせば夫人には  
 誕生あらん瑞相が

よめも王子は世の中よ  
 利益を與へ諸人の  
 若まふ即位したまハゞ

類ひもあらぬ聖りにて  
 無明をやぶりたまふべし  
 あらゆる世界の君たらん

時しも晝の眞中にて  
 高く聳へて葉を茂り  
 無憂樹の下よ立ちたまふ  
 その枝垂れて日蓋ひを  
 くさくさの花たちまらよ  
 かたき岩根はいと清き

摩耶の夫人を宮園よ  
 香ばしき花咲きみてる  
 こゝろある木の時を知り  
 夫人の上に造りたり  
 生ひてぞ臥床となりよける  
 玉の泉を啖き出し



浴池よまゝそは供へけれ  
 太子誕生ましくて  
 三十二相とたゞへたる  
 まのよし早く宮中よ  
 迎ひの装ひ美麗なる  
 人の所業とのこりなく  
 四天王よて蘇迷慮の  
 東天王の従卒は  
 眞珠の楯をかざしたり  
 青馬のそびらよ打乗りて

さても夫人は苦惱なく  
 そのみかたちを充足りて  
 めてたきしるしを具へたり  
 聞へよければ王子をば  
 轎の輿丁は誰なるぞ  
 青銅の板よかきしるす  
 山よりこゝよ下りけり  
 身よ白がねの鎧衣て  
 南天王の鳩槃荼は  
 手よ碧玉の楯をもち

西天王の龍神は  
 珊瑚の楯を手よ把れり  
 黄色の馬よ黄金の  
 總べて彼等の行装は  
 輿丁よ姿やつしたり  
 人よ知らね歩みける  
 天の喜び衛るなり  
 その故よしを知らされは  
 心くるしく思ひしも  
 金輪如意珠雲を踏む

紅ないの馬よ跨りて  
 北天王の夜叉のむれ  
 楯をとりてぞしたおへる  
 目よは見へねど降り來て  
 諸天も其日諸人と  
 まは釋尊の降誕を  
 さはれ淨飯大王は  
 種々の異なる兆を見て  
 占夢の博士の告げよより  
 駿馬、白象、主藏神



主兵の臣よ玉女ふる  
 一千年に唯一度  
 類ひまれなる聖王と  
 いと賑はしき祝祭を  
 されば市街を掃き清め  
 樹々よは旗をひるがへし  
 剣を抜きて舞ふもあり  
 舞妓は羅綾をひるがへし  
 鹿と熊との皮きたる  
 相撲の力士鶏合ハセ

七つの寶身よそなへ  
 支配のためよ世よ出る  
 なるべき王子と聞知りて  
 都市の中よ命じける  
 薔薇の香をかほらせつ  
 くまなく燈火かよげたり  
 戯術幻術綱わたり  
 鐘鼓彈弦相和しつ  
 奇しきおどり虎つかひ  
 樂人あまようちむれて

その賑ひはなか〜よ  
 夫れのみならず遠きより  
 太子の誕生祝はん  
 よしき織物縫ひのきぬ  
 珠玉は光りを争へり  
 祝ひの心盡しける  
 悉達多とよびたるは  
 畧語とあそは知られけれ  
 頭に霜を戴ける  
 永く浮世の塵を避け

言葉よ盡すべうもなし  
 つどひ集る商人は  
 黄金の盤よさよげたる  
 眞珠栴檀くさくの  
 所屬の市府も劣らじと  
 されば太子の幼な名を  
 總べて榮ゆるてふ文字の  
 つどへる人の其中に  
 阿私他の仙と稱するは  
 俗事は絶へて聞かざるも



世尊の降世ありしとば  
 彼れは齡と斷食の  
 智識を得てしものなれば  
 王は間近く招きよせ  
 夫人もやがて幼兒を  
 ねかんとまそはしたりけれ  
 さなし給ひそと云ひつゝも  
 「幼き太子は己が君が  
 君は正しくまの御兒が  
 三十二相八十の

諸天の歌よ聞き知れり  
 功德よよりて廣大の  
 いと尊くぞ見へにける  
 厚く敬禮したまへば  
 かの仙人のあしもとに  
 阿私他は急よおし止め  
 八たび首を地よつけて  
 これらも伏して拜すべき  
 薔薇の光色あしの紋  
 隨形好を見るときは

あの君まそは佛陀なれ  
 その法學ぶ諸人を  
 さるを我れ今年老ひて  
 聞かざることを恨みなる  
 拜したるこそまだしもの  
 嗚呼大王よ太子こそ  
 人の樹林よ咲きいづる  
 されば一たび開きなば  
 愛の甘露を撒らすなり  
 天の蓮花は生ひ出でん

尊き法を説き示し  
 助け給ふよきハまれり  
 死期も近きよあるなれば  
 さはさりながら太子をば  
 幸ひとこそ云ふべけれ  
 數萬年よ唯一度  
 愛でたき花と知りたまへ  
 世界の上よ智惠の香と  
 君が王家の根よりして  
 實よ此上なき幸がかし



忘かばあれども復太子ゆへ  
貫ぬく如きことあらん  
復善き夫人の君の  
人天共よ敬愛を  
もはや悲哀はあらざるぞ  
されば七日のその内よ

一ツ 劍君が鷹を  
免れがたきことわりぞ  
誕生ありしそれゆへよ  
表し居るなる善き夫人  
夫れ生命は悲哀なり  
君の悲哀は終りなん

第七日のその夕  
笑めるが如く眠りけり  
心寛かよ忉利てふ

摩耶の夫人は眠りけり  
睡りは遂に醒めずして  
天よぞ登りたまひける

その身は諸天善神の  
樂み極めたまひあり  
乳を太子よ奉り  
佛陀世尊の唇を

渴仰うけてまの天の  
姨母の摩阿波闍波提女は  
世界よ福を授けてし  
みづから養ひまいらせぬ

夙く八年を過ぎければ  
太子たるべき身を以て  
技藝を吾兒に教へんと  
そは何故ぞ王は尙  
佛陀の光榮とその道に

注意せかるゝ大王は  
知らでかなわぬ諸般の  
思ひが起したまひける  
奇しき兆のあるを思み  
到らん爲の苦行をば



あらずもいなと思ふゆへ  
大臣あつめ問ひたまふ  
知るべき業とのこりなく  
たゆぐき者は誰ならん  
「毘奢蜜多羅は二人なく  
奥義と究め諸般の  
彼れにますもの候はず」  
吉日撰みまみへける  
鋼玉石の粉を撒ける  
師の前近く立ちたまふ

かくは急ぎて諸々の  
「そも太子たる身にありて  
教ふる師とし仰がんよ  
各々直ちに答へらく  
賢き上に經典の  
學問技術に至るまで  
毘奢蜜多羅は命をうけ  
太子は寶石ちりばめて  
香木盤と筆を執り  
毘奢蜜多羅は徐ろに

貴種の人のみ學ぶべき

ガヤトリとさん呼びさせる  
偈文を静めよ讀誦せり

オム、タトサヒターンレリマム、  
マール、マムサヤ、ヤーンマント、  
マール、マムサヤ、ヤーンマント、  
ガヤトリとは、波羅門教の聖書か荷吠陀中の偈文にして英語にて其全文を  
示せば(牛津大學梵學教授のモニエルの第二十頁に出づ)

“Let us meditate on that excellent glory of the divine vivifier;  
may he enlighten (or stimulate) our understandings.”——Professor  
Monier Williams' "Indian Wisdom", p. 20.

神の光を思慮すれば 我等の智慧もあらはれん

こは波羅門教徒か、朝暮の拜禮に唱ふる偈の秘密の偈文にして亞細亞の光輝に此英譯なし



毘奢蜜多羅は御身には  
告るに太子猶豫せず

此の經かきて見たまへと  
唯一体の書にあらで

註(古代の書法  
なりと云ふ)

バルシヤ、ウツク、ヤバ、チルチ  
種々の文字を用ゐつゝ  
蛇を拜する地下の人  
メーシヤ人や埴上に  
凡そ世界に在りと云ふ  
師のいふまゝ、句節をば  
毘奢蜜多羅は之を見て

シクヤニ、ダラド、マナ、マナヤチャー、  
穴居する人海の民  
火や日輪を拜する  
住める人等の文字記號  
あらゆる國語用ひつゝ  
一々書きが記しける  
「もはやそれにて餘りあり

されば算數に移りなん  
一二三四十までよ  
終にラクまで讀みたまへ  
一十百位ラクまでよ  
聲もしづかよ言ひけるは

まづ我がいふよ從ひて  
十より百に千までよ  
太子は彼れが云ふまゝよ  
至れど猶も止まらず  
「さてその次は俱侑那由他

ニナハト、カンバ、ビスカンバ、  
ガンヂカス、またウトハラス  
ハスタギリの地をくたき  
さて其次を夜の星を  
また其次は大海の

アバブ、アツタ、クムツより  
ブンダリーカスその上を  
微塵よなせるバツマスガ  
記すよ用ゆカタよして  
滴數ふるユチカタガ



インガよりしてサルバニケバ  
 アンダカルバは其次が  
 一万年の其間だ  
 雨滴の數とこそはしれ  
 未來と過去の劫數を  
 マハカルパスに至るなり  
 「善哉太子既にそや  
 いま某も尺度まで  
 太子はいとも謙遜よ  
 パラマーム十を合せまば

恒河の濱の砂の數  
 いやくすみて阿僧祇を  
 目ごとに世界に降るべき  
 かほ其次は天神の  
 數ふると云ふ大數の  
 仙はその時云ひけらく  
 これらを知りておわするよ  
 教へん要は更な無し  
 「師よ我言を聽きたまへ  
 パラスクシユマと成るべし

その復十はトラセレン  
 日光中に浮びある  
 その復七は小鼠の  
 十は即ちリキヤと云ひ  
 其また十は蜂腰の  
 マングよ芥子大麥の  
 指の節なりまれをまた

註 大指と小指を張り延ばしたる長さ

註 肘より中指の長さに至るまでの長さ

そを復二十合すれば

之をば七つ合せなば  
 極細微物の長さなり  
 鬚の尖なりそのさきの  
 リキヤ十をばユカと云ふ  
 七倍といふ麥の心  
 粒の長さよ其十は  
 十二は即ち一スパン  
 漸く進みてキユーピット  
 杖弓槍よ至るべし  
 一度吸氣するその内よ



人の走れる長さあり  
 師よ今われはヨシヤナには  
 其數あげて示さんと  
 仙は痛くも愕きて  
 太子は實に大師なり  
 嗚呼某は太子をば  
 太子は書籍よよらずして  
 尊敬心のあることを  
 來りたまふに外ならず  
 師の仙太よ盡しける

尙その上はガウ、ヨシヤナ、  
 幾個の塵をならぶるか  
 云ひつゝ直ちよ讀みたまふ  
 「太子は教師の教師なり  
 唯れか太子の師たらんや  
 仰ぎて拜したてまつる  
 萬事を知ろしめすことよ  
 示さん爲よるが門よ  
 太子は厚き敬禮を  
 言語柔和よ賢くて

容貌威ありて猛からず  
 慈愛の心深かりき  
 羚羊の狩のそのおりに  
 太子よ及ぶものななき  
 兵馬を御する熟練の  
 而かれ狩の半ばよて  
 鹿を走らすこともあり  
 馬の苦しき呼吸を知り  
 憂へんことを見るときと  
 自ら思ひ知るときは

所作は優美よ鄭重に  
 されど勇氣に至りては  
 騎馬の童子の多かるも  
 園よ催ふす擬戦よも  
 彼れよ及ぶは無かりけり  
 太子はとどと止まりて  
 半ば勝ちたる競馬よも  
 復友人のうちまけば  
 競ふ心の果敢さを  
 とどと止まることもあり



雙葉の幼樹年を経て  
榮ゆる如く慈悲心を  
忘めははれども今も尙  
悲哀苦痛の真相は  
及ばぬことまゝ道理なれ

いとも長閑けき春のころ  
ヒマラヤ山の半腹なる  
音高らかな放ちつゝ  
太子の従弟提婆達多

下蔭廣き大木と  
年を逐ひてぞ彌増せる  
幼き身よておとすゆへ  
如何なるものか考察の

御苑の上よ鶴は  
己が巢さして愛戀の  
群を連れて翔りたり  
弓よ箭つかひ兵と射る

ねらひ違はず眞先なる  
大地よ落ちて紅なひの  
太子と結跏趺座しつゝ  
芭蕉の巻葉ののびし如き  
亂れし翼を齊へつ  
弓手よ鳥を持ちつゝも  
矢の根を抜きて疵口よ  
濺ぎていたこりたまひけり  
痛みの真相知らざれば  
手くびよ強くおしあてよ

鳥の翼を貫けば  
血潮は翼を染めなせり  
鳥とば膝よかきのせて  
いとやはらかき手もちて  
とゞろく動悸を撫で静め  
右手もて無残よ貫きし  
露冷かなる蜜汁を  
さるよても復太子には  
我と親ら矢の根をば  
痛みを覺へ愛憐の



情を涙と溢れ出で

再び鳥をいたわりぬ

その時提婆の使ひ人  
「わが君鳥を射たまひて  
命を受けて某は  
太子よ渡したまわれど  
いな渡すまを及ぶまじ  
殺せし人よ送らんは  
鳥は今尙生命あり  
止めしのみよてまの鳥を

來りて太子よ白しける  
薔薇の間に落ちたるを  
受けとらん爲まいりたり  
悉達太子の答よは  
その鳥にして死したらば  
理の當念といふべきも  
汝が君は進行を  
取り得しものと思ふなよ

提婆達多は答して  
人のもよをあらされど  
その死と生よかはらず  
わがものたるを疑はじ  
太子は己が滑らけき  
心と嚴そかよ宣ふは  
我れ天權の慈悲よ依り  
足下はあづかる所なき  
これ今感ずるところあり  
教へんところ期するなれ

この鳥雲間よあるほどは  
落とし人よ屬するを  
既よわが矢よ墜ちぬれば  
太子よ返したまへがし  
喉よ鳥の頸をあて  
「いふまの鳥は我がものぞ  
我がものとなしはぐまさん  
餘處ある鳥と思はれよ  
遍く慈悲を世の中よ  
無言世界の譯者とし



人のみならず一切の  
 思へることを知りたまへ  
 賢き人の言を聴け  
 正邪如何を論ずるよ  
 定めかねて居ありける  
 聖僧出で云ひけるは  
 助けんとする人あらば  
 所有の權を多からん  
 害ひ毀つのみなるも  
 存する理致のあるなれば

苦惱の淵を涸らさんと  
 足下は猶も疑はゞ  
 衆議に附してこのまとの  
 うの曲直を孰れとも  
 かるゝ折しも一人の  
 そも纏なる生物も  
 殺さんとするものよりも  
 殺さん人は生命を  
 助くる人はその物を  
 彼れ鳥をば與ふべし

あの裁判を誰人も  
 王は人してあの僧を  
 何地行きけん影もなし  
 蛇を見ありと云ふ人の  
 示現なりとは知られあり  
 顯ハしたまふ元始なり  
 癒へて再たひその群よ  
 鳥の憐み而已が知る

正しきものと思ひあり  
 尋ねければども早已に  
 されどもまゝを匍ひ出る  
 在るより見れば天神の  
 是れ釋尊が慈悲心を  
 然るも彼れの慈悲心は  
 悦び還る唯一の

或る日よ於て大王は

「來れ愛子よとも見ん



見よくかゝる春景色  
 饒多の富を興へなん  
 民を養ひその君の  
 みの領國も時來り  
 御身のものとなるがし  
 照りかふ花を野邊に満ち  
 いと麗ハしき景色がと  
 馬をすゝめてながむれば  
 きしむ聲する軛をば  
 起きて轉べる有様は

肥へるる土地は蒔る人よ  
 復如何ほどよ我も土地は  
 懐満たすことなるが  
 こも身烟とならんとき  
 若葉も草も緑り添ひ  
 耕す聲も興添へて  
 云ひつゝ二人もろともよ  
 牡牛は強き肩をもて  
 牽くや肥沃の土塊の  
 長く滑らかなる浪の

犁より起る如くなり  
 細浪うてる水流の  
 檸檬草の生ひ茂り  
 林よ巢ふ鳥の歌  
 甲蟲爬蟲歸きすだき  
 芒果の枝よ鳥は居て  
 野牛の間だよ白鷺の  
 黄金色なす大空よ  
 彩色なせる殿堂の  
 遙かよ聞ゆる村太鼓

棕櫚の間よ音たてよ  
 岸よ咲き沿ふ鳳仙花  
 彼方は種蒔く人のあり  
 深く茂れる叢村よ  
 春を樂む如くなり  
 下よハ栗鼠の走るあり  
 威高く歩むも見ゆるなり  
 鳶はかけりて輪を畫き  
 圍りは孔雀飛びかよひ  
 婚儀を祝ふ聲すなり



萬のけしき太平の  
 太子は喜びたまひけり  
 彼れを知りけり生活の  
 口を糊せんその爲よ  
 骨をも身をも摧くらん  
 牛とあへぎを共よしつ  
 刺針の衝に當らん  
 蟻は蚶蜎の餌と爲り  
 その復蚶蜎蛇よして  
 雀は百舌鳥の嘴に

象ならぬはなきを見て  
 されども深く想ひ見て  
 薔薇よは刺の生ずるを  
 黔き農夫をいかばかり  
 燃ゆるが如き暑さよは  
 鵝絨なせる牛の腸  
 猶それのみにあらずして  
 蚶蜎ハ蛇の食となり  
 鳶の餌食となるならん  
 その身と共よ我が把りし

ものとも食とせられなん  
 殺せるものも殺しある  
 蠕より人よ至るまで  
 弱肉強食定めあし  
 殺害するよ於てをや  
 修羅の巷と謂つべし  
 まれが彼等のあらこせる  
 さるよても復農夫等の  
 鹽味を帯ぶることならん  
 林の中よ強弱の

生は死よ依り生活し  
 ものも再たび殺されん  
 互よ殺し殺されて  
 況や人を同類を  
 されば目よ見る好景も  
 太子は痛く嗟嘆しつ  
 幸福の地といふべき歟  
 もちある麵包は汗じみて  
 牛のくるしき幾何が  
 争ひ常よ劇しくて



空飛ぶものも水中よ  
 みの苦しみを免がれん  
 かくて佛陀は瞻部樹の  
 深き病の考察を  
 深き病の源は  
 癒すてだては如何よや  
 苦惱を除く観想は  
 凝りて何時しか精神も  
 汚れも永く消へ果てつ  
 先禪定よ入りたまふ

泳げるものも如何では  
 視念すへきはこゝろがし  
 下よ膝組み生活の  
 みの時よみそ振めけれ  
 何處よ在りや之をまよ  
 慈悲愛憐の衷情と  
 心の中よ溢れつゝ  
 おぼろよなりて愆と我が  
 この道たどる第一歩

みの時五個の神仙は  
 巔高く飛びけるが  
 過ぎよし時よ自在なる  
 その働きを失ひて  
 彼等は問ひきそ如何よ  
 如何ある殊勝の力ぞと  
 感ずることを得ればなり  
 知るべき力あればなり  
 救世の思ひよ沈みつゝ

太子の在す樹の上を  
 彼等の翼忽ちよ  
 飛行の術がかりける  
 我等の飛行止むるは  
 彼等は凡べて神力を  
 清き聖の存在を  
 見おろす下よ釋尊は  
 薔薇の色なす後光をば

註(羽衣きたる天人)



放ちて爰に居ましけり  
仙等よ是れぞ世界をば  
降りて拜しまつるべし  
讚美の歌を唱へつゝ  
雲井遙に飛び行けり

森の中より聲ありて  
救はん爲の佛なるが  
こゝに彼等は降り来て  
諸神に告げんその爲に

はや日中も過ぎ去りて  
時ハ來れど彼れハ猶  
總べての不影は移りしも  
陰のみ移りやらざして

日も西山に春かん  
静慮に入りてれをしける  
彼のおはする臆部樹の  
その頂を掩ひつゝ

斜陽の射るを防ぎたり  
太子よ胸の叢雲の  
我も蔭をばうつすまじ

時よ梢に聲ありて  
霽れて隈なくふるまでハ



亞細亞の光輝 第貳篇

光陰關かく釋尊も  
 王は令して宮殿を  
 スバ、スラムマ、ラムマとして  
 一は角ふる材を用ひ  
 冬のためとして暖か  
 花紋あせる大理石  
 また他の一を煉瓦よ  
 チヤムバクの萌へ出る時

二九の齡とふり玉ふ  
 太子の爲に造らしむ  
 三個の宮居は宏大  
 内は檜の板はりかどし  
 他は石造の殿つくり  
 夏のためとして冷か  
 青き豊を覆ひけり  
 種蒔く春が愉快なる



これ等の殿のまわりよは  
 繞る流れの水清く  
 あふたこふたに美麗なる  
 芝生の景色一入よ  
 悉達太子は此園よ  
 素より富有の身にあれば  
 性亦人に立ち勝り  
 されば世よある幸福を  
 憂き世と思ふ哀念の  
 是れさほ清き湖の

ふもめもつきぬ御園生よ  
 花さきにほふ艸むらの  
 小家もありて緑り添ふ  
 目をふぐさめぬものづさき  
 己か随意よ逍遙し  
 時々の遊樂さまをかゆ  
 いと明敏よおわしけり  
 受け玉はざる時さきも  
 蔭は心を覆ひたり  
 鏡よ似たる水面よ

浮べる雲の影を受け  
 之を見るより大王を  
 卿等とさきよ老仙と  
 いかよ考へ居たまふぞ  
 わび心臓の血よりさほ  
 愛子はあらゆる敵人の  
 残る隈なく世界をば  
 王とふるべき善運は  
 若し然らずは太子よを  
 淋しき道を悲しくも

光を失ふ如くさり  
 大臣集め問ひ玉ふ  
 占夢の博士の豫言をば  
 彼れをかくこそ言ひにけれ  
 我の爲よはいとおしき  
 首を足下よ踏みしきて  
 支配あしてぞ王中の  
 固より望むところあり  
 棄欲の心と信仰の  
 たどるところは云ひよけれ



今我が殿に居るとても  
 求むる如く覺ゆたり  
 太子の世界支配する  
 如何なる術あるならん  
 はや我が爲に評議せよ  
 ものはいひけり大王よ  
 あさき病を癒すなり  
 つまびん事は容易なり  
 經驗だもなき事あれば  
 御伽のものを求むるは

彼れの心は此の道を  
 されども賢なるおんみらよ  
 心起さんその爲に  
 我れは忠なる卿等よ  
 中よもいとゞ年たけし  
 そも愛戀はこの如き  
 婦人の術もて彼の胸を  
 太子は未ださるものよ  
 柔和の夫人うるわしき  
 これ最上の術ならん

青銅の鎖を用ふとも  
 婦人の髪の一すぢは  
 この術計は妙なりと  
 王は答へてよしさらば  
 人の好は忘りがたし  
 彼れのまわりを取まきて  
 撰めとさとし聞ゆとも  
 娯樂を程よく避けんのみ  
 「されども多き女子の中  
 樂士を見ゆる顔せや

止めかねたる哀念を  
 容易に之を縛し得ん  
 共々贊して奏せしよ  
 后妃を求め與ふるも  
 たとひ美麗の園をもて  
 己が好める其花を  
 彼れ唯咲みてまだ知らぬ  
 他の大臣の云ひけるは  
 婀娜たるものもあるれば  
 世界の闇をさますてふ



黎明よりもあてやけき  
 ねむふは公開の節宴よ  
 乙女等多くつとへつゝ  
 命じ玉ひて勝れたる  
 褒美の品を賜ひてん  
 太子の御座を過ぎんとて  
 動かすものゝ一二人  
 これぞ愛戀その物の  
 これぞ殿下を幸福よ  
 大王喜び容れ玉ひ

美人もふきよあらざれば  
 容貌うるとしき國內の  
 釋種の手慣れし遊戯をば  
 ものよは太子御手づから  
 がくて褒美を受くるもの  
 憂きよ沈める玉顔を  
 やはかふき事あるべきが  
 眼もて愛戀撰ぶふり  
 導く術よ候ふが  
 障あらざる日を撰び

傳令役よりしめすやう  
 上の仰よあるなれば  
 皆宮殿よ集ひ來よ  
 賞與の賜あるべきが  
 最も貴き品を得ん  
 妙徳城の乙女等は  
 かみもあらたな櫛けづり  
 肩掛衣服すべて皆  
 かよはき手より足までも  
 装ひ凝らす童女等を

遊戯の會を催さん  
 形すぐれる童女等は  
 太子自らそれくよ  
 最も勝れるものはまた  
 されば其日よふりぬれば  
 己もさなく装ひて  
 清く浴みし香を吹き  
 互よ華美を争ひて  
 眞紅色よ化粧ひせり  
 歩み静かな御座近く



進みよければ流石よも  
 地上よ注ぎ見上げ得ず  
 心動かず事あくて  
 受くる乙女等かこみて  
 或る愛らしき乙女子は  
 笑をまねくも足りかんと  
 祝ひの聲を放つとき  
 逃るも如く賜を  
 ふるひ慄き歸りけり  
 おわすることぞ雷ならぬ

彼等の黒き眸は  
 太子は温雅よ露ほども  
 めましよければ賜を  
 仰ぎ見るものなかりけり  
 他またちまさり此君の  
 爰よ集へる人々の  
 怖ぢ恐れたる羶羊の  
 得るとそもまよその群よ  
 かくも太子の神聖に  
 かくて次第に乙女等は

一人くよ賜を  
 都の花も残りなく  
 かゝるおりしも進みしは  
 寶座よ近く進み行き  
 看つゝ太子は忽ちよ  
 御側よ侍べる人々は  
 天津乙女の婀娜態  
 夫戀ふ鹿の目もとせる  
 筆よ寫さんやふもなし  
 氣高き頭はうつむかず

得つゝ歸りて今ははや  
 賞與の品も盡よけり  
 是れぞ耶輸陀羅少女なる  
 静かよ立てるその人を  
 いたく驚き玉ひしを  
 よく目のあたり見たりけり  
 歩めるさまは毘摩が  
 その顔せのうつくしき  
 拱きし手を胸よあて  
 なむむる太子打ぶめ



「太子よ妾よ賜ふべき  
 尋ねよければ答へして  
 されどめてたきと都府の  
 御身よあれば今これを  
 縁玉石の頸環とば  
 胸のまこりよまとひつゝ  
 愛の光を放ちけり

物やおとすと及ましげよ  
 「たまものはみな盡きよけり  
 ほまれとあらんうつくしき  
 代りよあたへ得させん」と  
 やどらばつして耶輪陀羅の  
 互に見合すまふじり

その後永く年を経て  
 何故ありて其始め

佛道成就ありしとき  
 釋種の少女見玉ひし

其折からよ御心の  
 問はれて佛陀は答へけり  
 始めてあひしよあらざるが  
 獵師の男兒ありけるが  
 ヤムンの泉の邊にて  
 タベよ野兎の戯れて  
 縦の木影よ打集ひ  
 彼れは審判を掌る  
 かざりを頭よ附けたるが  
 少女は遂よ勝ければ

遂よ動き玉ひきと  
 「我々二人その時よ  
 久遠のむかし一人の  
 難陀天女の立たまふ  
 森の少女と遊びつゝ  
 輪を成し走る様をふし  
 走りを競ふその時よ  
 少女を各々かこりたる  
 いと終りよ走りける  
 男兒は馴れたる鹿の兒よ



おのが心の愛戀を  
 されば彼等は林中よ  
 連理の契り淺からず  
 看よ陰れたる種子よても  
 芽ぞすも如く善悪も  
 過去のまゝとぞは時來り  
 甘き菓や酸きこのみ  
 かくいふ我れば其時の  
 耶輸陀羅はかの少女なり  
 過ぎよしちぎり今もまた

そへて少女よ與へたり  
 樂しき月日送りつゝ  
 共よ生をば終へたりき  
 雨ふきあまたの年を経て  
 苦樂愛憎みあすべて  
 輝ける葉や暗き葉や  
 持ちて再びあらはれん  
 遊びを爲せし男兒にて  
 生死の輪廻はてしかく  
 二人の中にあらとれき

太子手づから褒賞を  
 晴れの試場の有様を  
 事の始終を奏しけり  
 耶輸陀羅少女を看るまでは  
 ふと見玉ひし其時は  
 少女を太子をうち仰ぎ  
 寶賜ひしその事と  
 様子を大王聞き玉ひ  
 好餌をこそは得たるなれ

授け玉ひしその時の  
 見聞く人たち大王よ  
 善覺長者のむすめなる  
 如何よ無心よ在せしか  
 如何よ御氣しき動きしか  
 太子は少女を看守りて  
 すべてふたりが愛憐の  
 看よ我々は既よはや  
 雲井を翔る隼の



となす落るも遠からじ  
 約を少女よ結ぶべし  
 高貴の美姫を娶るよは  
 人よ對して己が身の  
 王者といへども免れぬ  
 かゝれば其父云ひけらく  
 吾愛はおちこちの  
 求むることの切ふれば  
 弓馬劍道皆すべて  
 とれらも榮如何あらん

使送りて婚姻の  
 されども釋種の習はせよ  
 まづその武藝を試むる  
 手練の技をあらはすは  
 古き定めとしられたり  
 先づ大王よ告げ玉へ  
 公子等互よあらそひて  
 いと温和なる皇太子  
 彼等よ勝り玉ひかば  
 太子は實よ諸々の

藝道さこそ勝るらめ  
 籠りがちよておとすれば  
 斯る答へよ大王は  
 そは何故ぞ太子よは  
 迎へんことを望めるも  
 調馬の術に名を得たる  
 劍法無二の難陀あり  
 笑つて云ひきこれ亦  
 彼等の好める藝能は  
 如何なる人よも立合はん

志かはあれども太子よを  
 此こと如何よあるやらん  
 轉た心を痛めけり  
 かもうつくしき耶輪陀羅と  
 弓よ長ずる提婆達多  
 アーヂユナありて尙も亦  
 されど太子はひそやかよ  
 これ等の術は修えたり  
 如何なる試合も肯はん  
 これ等如きよ躊躇はず



父王の命を待たんのみ  
無下に失ふことやある  
「悉達太子は誰よても  
望まん人よ會しさん  
冠りたらんその事を

我身宿世の愛情を  
第七日をトひて  
武藝よおける試合をば  
耶輸陀羅嬢は勝つ人の  
あまねく傳へておきてけり

第七日とかりければ  
愛の獵場の名花さる  
かなづる樂の音よ連れ  
角も黄金の飾せり

釋種の貴族集りき  
耶輸陀羅嬢も親族も  
飾れる輿を牽く牛の  
先づ王族のデバタツタ

貴きナング、アルヂユナや  
いふべき人の耶輸陀羅よ  
太子はおの白馬の  
驚かさされて嘶ける  
出で來りつゝ國王と  
異なる食よ生活し  
王化の澤よ潤ほへる  
かくて太子耶輸陀羅を  
絹の手綱を引きしめて  
最も價值のなきものよ

皆少年の花としも  
望をかけぬものぢなき  
かくめづらしき外界よ  
カンタカの脊よ跨りて  
異なる家よすまるしつ  
されど苦樂は同じくし  
あらゆる民を見やりけり  
看玉ひし時ほくそ咲み  
ひらりと大地よ降り立ちて  
いかでかかゝる眞珠をば



持つべきことのあるべきが  
 とおもくまでよ少女をば  
 ありやあしやを今爰よ  
 叫び玉へば弓の手を  
 青銅鼓を六ガウの  
 アルヂユナもまた六ガウよ  
 共よ置きてぞ控へける  
 遠きよ置かせ玉ふゆへ  
 的とあせるも如くあり  
 いづとはかりよ兵と射る

これと競はん人々よ  
 求めんとせしその甲斐の  
 いざ試みん來れよと  
 ナンダもさらばくらべんと  
 隔たり遠く置きければ  
 デバダタ公子は八ガウよ  
 さるよ太子を十ガウの  
 恰も小貝の殻をもて  
 三人のものは矢をうがへ  
 ねらひ違はずアルヂユナも

ナンダも共よ一様よ  
 殊よ勝れてデバダタも  
 まとの両面射ぬきたり  
 その妙術よおどろきて  
 之を見しより耶輸陀羅は  
 あらざるべきかと恐れつゝ  
 三人の把りし其弓は  
 銀の弦かけとたし  
 強き弓をも太子よは  
 少しく弓をひきければ

おのもまともぞ射あてける  
 すぐふるねらひ過たず  
 こゝよつとへる群衆を  
 やよとばかりよほめよける  
 もしや太子よ過ちの  
 看るよ堪へずと眼掩ひき  
 漆を塗りて筋を捲き  
 強卒さらではひき得ざる  
 取り試みてあどとらひ  
 その正中のふとかるも



折れて二つとふりよけり  
 遊戯に用ゆべくあるも  
 誰れよてもあれ今すこし  
 弓を持つものあらざるや  
 「かの神殿よおさめたる  
 由來久しく知りおたし  
 よしつるかくる人あるも  
 太子命じて是もまた  
 持ち來れよ」とありければ  
 往時の弓はぐるぎねを

太子は云ひき「此弓は  
 愛よは用ひ得ざるべし  
 釋種の公子よ適すべき  
 一人答へて云ひけるは  
 獅子頰王の大弓は  
 弦をかけたるものもさく  
 これをひくものよもあらじ  
 人の用ゆる武器されや  
 頓て彼等の持ち來る  
 きたひて造りおせるよて

野牛の角の様をふし  
 卷鬚をもて飾りたり  
 膝よ横たへ強弱を  
 「とがいとこたち今一度  
 いはれよけれどさかくよ  
 太子は少く身をもたれ  
 難なくかけて強音を  
 空を翔れる大鷲の  
 高く清けくふりよたる  
 かよときものあやしみて

分支のまがり黄金の  
 太子はやをら手よ取りて  
 再び引きて試みつ  
 此弓をもて射玉へ」と  
 彼等の手よはあひかたし  
 弓をまげつゝそのつるを  
 するどく響かせ玉ひけり  
 翼の音する如くにて  
 その日我家よ留まれる  
 「そも彼音は何事ぞ」



人々これに答して  
射んとすなせ玉ふなる  
太子は弓よ矢をつもへ  
空をかすめて過たず  
打ぬくのみか野の面を

「これぞ太子の弦かけて  
獅子、頬王の弓の音  
きつて放せば疾き御矢は  
いと距たれる鼓をば  
遙かに飛びて影をなし

次よ出で来るデバダツタ  
厚さ六指のタラス樹を  
アルヂユナはまた七指の樹  
悉達太子は二株の

いざや劍道比べんと  
只一打よ切よけり  
ナンダは九指の樹を切れり  
相連れるその樹をば

空よ閃めく電の  
御手のいたく冴えたれば  
幹は依然と立ちたりき  
「彼れの刃をそれたるぞ」  
見えずおのゝき恐れける  
南の方より軟けき  
一雙の幹は緑なる  
地上よこそハ倒れたれ

たゞ一打よ切り玉ふ  
地よも倒れず其儘よ  
さこそとナンダは叫びけり  
乙女は直よ立てる樹を  
始終を見居たる風神は  
風をば吹かせたりしゆへ  
その巔と諸共よ

彼等は又も逞しき

駿馬を爰に牽き来る



されども白きカンタカは  
 泡の口より垂れ落ちて  
 二十の槍の長さをば  
 來れる馬のその中に  
 遙か後べよおくれたり  
 「我々としてもカンタカの  
 さどて勝たざる事もある  
 人々をして見せしめよ  
 跨る事を得べきやと」  
 暗夜を欺く黒馬は

疾き事恰も矢の如く  
 地面に達するその時間に  
 はやくも飛びりさればこそ  
 いとすぐれたるものさへも  
 ナンダをさほも懲りづまよ  
 如き馬をば持ちぬれば  
 されば荒馬ひき來り  
 誰れかよく其あら馬よ  
 命よ從ひ牽き出す  
 三すじの連鎖はひかれつゝ

はげしきまごし廣き鼻孔  
 誰れとて未だ乗らされば  
 三度釋種の公子等は  
 すまひよければ飛び狂ひ  
 得つるは塵と耻とのみ  
 脊よ止るを得てしかば  
 一鞭あてゝ轡をも  
 口をば持ちてありければ  
 交々おこる怒氣奮氣  
 不意に齒をむきアルゲユナの

ふさふさし垂るゝ鬣や  
 蹄鉄も穿たず鞍おかず  
 各々これに乗らんとて  
 彼等を大地に投げしめへ  
 只アルゲユナを暫時の間  
 連鎖放ちつ横腹よ  
 縮て力のある限り  
 悪馬を何とて猶豫せん  
 一回廻りて來るまよよ  
 足よ噛み付き引きおろし



あゝや公子は此馬よ  
 馬丁は慌て集ひ來つ  
 引き止むるを得たりけり  
 「悉達太子とこの駒よ  
 その肝臓は暴風あり  
 されど太子はのたまはく  
 前髪あれば事足れり」  
 何よかあらん囉きつ  
 前よ置きつゝ静かよも  
 背と波立つ横腹を

殺されんとぞ見へよける  
 漸くよして此馬を  
 されば叫べり皆人を  
 觸れしめ玉ふこと勿れ  
 血はまた燃ゆる燄あり  
 「連鎖を放てよれば唯  
 やはらかく手よ握り持ち  
 右の手の掌馬の眼の  
 怒れる顔を撫でをろし  
 とすりよければ不思議よも

緇黒の駒もその猛き  
 恰も彼れを我佛陀を  
 静かよ彼れを乗せつゝも  
 いと老實よ行きければ  
 「最早それよて過分あり

頤を洗えて温順よ  
 禮拜するが如く立ち  
 膝と手綱よ従ひて  
 之を見るより諸人は  
 悉達太子が勝りたる」

總て敵對せしものも  
 みか一樣よ答へけり  
 善覺長者は云ひよけり  
 いとよ愛せる方あれば

悉達太子が勝れると  
 かゝれば乙女が父親の  
 「太子は實よ我々の  
 太子の勝れ玉はんと



素より思ひ居たりしも  
 獵や浮世の苦業より  
 知るへき業をいつしひも  
 夢の間よ得てし事  
 されば太子は既よ早や  
 かくて榮にある乙女子は  
 静かよ立ちてモグラふる  
 黒と黄金の面衣をば  
 前どのとかよ歩み過ぎ  
 太子のもとよ來りけり

さるよてもまた戦争や  
 得るよ勝りて大人の  
 薔薇の亭のその中よ  
 如何ふる魔王の教へし  
 得たる寶を持ち玉へ  
 群集の中よ己が座を  
 花の冠取りつゝも  
 軽く被ひつ公子等の  
 御威稜かしまくるまする  
 今ぞ太子は馬を降り

馬は太子の手の下よ  
 曲げて居たるその時よ  
 うやまひ拜して喜びの  
 いふべき顔と顯せり  
 自ら太子の頸よかけ  
 己が頭を置きつゝも  
 眼と足よ注ぎつゝ  
 御手の寶とふりよけれ  
 面衣を掩ひもろともよ  
 手どとりあひてゆくと見て

強きうまじをやはらげて  
 彼の耶輸陀羅は太子をば  
 愛かゞやきて天女とも  
 さて香しき花冠を  
 太子の胸の其上よ  
 たかくほこれる悦びの  
 愛せる君よ妾こそ  
 再び黒と黄金ふる  
 互ようごく胸と胸  
 諸人よるこびいたひけり



程經て成道ありしとき  
 何故ありて耶輸陀羅は  
 打被りしやまた箇程  
 世尊は答へ玉ひけり  
 半知られて見へたるも  
 過よし事も考へも  
 再び歸り來るるれば  
 幾萬年のその昔  
 さすらひめぐる虎ありき

人々問ひき「彼時よ  
 黒と黄金の面衣をば  
 ほまりかほには歩みしや」  
 「否余とても知らざりし  
 生死のわだち廻る間よ  
 また埋もれる生活も  
 今こそ思ひ當りたれ  
 ヒマラヤ山の深林を  
 我れこの佛陀は其時よ

註(牝虎の生を  
 受けたれば)

死よ近づくと知らずして  
 獸の群を縁さる  
 夜はまた星を戴きて  
 みちをば嗅ぎて殘墟よ  
 我が仲間ふるけものらは  
 美妙の牝虎居てければ  
 争ひをまを始めたれ  
 被りしものよその如く  
 黄金色よが輝ける

草の中よが伏しつゝも  
 我窩のまわりよ餌食せる  
 かゞやく眼もて窺ひき  
 人と鹿との蹈みたりし  
 飽とも知らであさりけり  
 森の中よて第一の  
 牝虎はすぐよ一場の  
 牝虎の皮は耶輸陀羅の  
 黒きいろよて繡とりつ  
 牙と爪との争ひを



いよよはげしく成りけるが  
戀よ流せし血の川を  
今もそ思ひ出したれ  
わが倒したるそれこれの  
なまめく足もてうねたてる  
互ひよ思ひ思はれつ  
共よ廣野よ出よけり  
卑く高くも廻るなれ

太子は夫人を得たりけり

牝虎は始終我々の  
打ち守りて居たりける  
牝虎は終よ我よ添ひ  
歎をば越へて吼へつゝも  
わが太腹を撫でさすり  
いとほありげよ歩みつゝ  
生死の輪をそやすみなく

意中の獲ものを得たりけり

赤羊宮よ當りたる  
婚儀の筵ろ開きけり  
金牛を置き絨氈を  
花環を飾りうでひもと  
米と香油を撒きたりし  
二片の藁の近くは  
愛の兆とは知られけり  
聖の大衆に施物なし  
賛美の歌を唱ひつゝ  
結びてこそはいはひけり

星の廻りのよき時よ  
釋種の例よ従ひて  
布き擴げつゝ婚姻の  
結びつ甘き菓子と破り  
赤き乳汁よ浮べたる  
死する時まで變らざる  
三度七歩よ火を廻り  
供養賑恤數多く  
新郎新婦の衣服をば  
頭よ霜を戴ける



高士はいみじく云ひにけり  
 われらもものゝ耶輸陀羅は  
 ものにしあれば一生を  
 愛でいつくしみ玉ふべし  
 喇叭の樂を奏しつゝ  
 太子の御手にわたしにき  
 されど大王今も尙  
 疾く諸人に布令なし  
 これぞ宏大美麗なる  
 廣き世界を尋ぬるも

「尊き太子よ今までは  
 今より一に唯君の  
 君に托する此人を  
 されば彼等は歌うたひ  
 「彼のうつくしき耶輸陀羅を  
 隈なき愛こそ久しけれ」  
 愛のみたのみとなさずして  
 愛の牢屋を築きけり  
 ビスラムバンの城にして  
 この樂園に相並び

目を驚かすものぞなき  
 緑の小山聳へたち  
 口ヒニの河水いよ清く  
 恒河の波に支流をば  
 南のかたにあたりては  
 薄空色をあらとせる  
 遠く世塵を避けたれば  
 街の市なす聲なくも  
 蜂の唸るにさも似たり  
 清き山路はいと白く

廣き御苑の正中に  
 麓に濺ぐ流せこそ  
 ヒマラヤ山の裾野より  
 そゝがん爲に來るなれ  
 酸果やサルナマケモノの森ありて  
 ガンナの花の生ひ茂り  
 風のまにくつたへ來る  
 林の中に隠れある  
 北に聳ゆるヒマラヤの  
 嘗て踏みにし人もなく



驚くべくも限りなれ  
 峨々たる巖切り成す岡  
 刻める如き絶壁は  
 身の毛彌立ち天上に  
 語るも如き風情なり  
 暗き樹林の廣がりて  
 雲の面衣を被りつ  
 薔薇梅に椈の森  
 豹の叫びも静かにて  
 輪を成し翔る大虚の

廣き高地に高た峯  
 緑の斜坡や氷角や  
 攀る心もいや高く  
 立ちて間近く神々と  
 雪の高嶺のふもとには  
 飛び散る瀧に繡どられ  
 尙其下につらなるは  
 木精にひゞく孔雀の音  
 岩根に遊ぶ野牛の聲  
 鷲の叫びも聞ゆなり

千草の色は春めきて  
 禮拜堂に敷き延べて  
 見ゆるばかりよ輝けり  
 光りまばゆき堂宇をば  
 小山の上よ築きたり  
 外に廊廓を廻らして  
 ラダー、クリレユナ、又林女  
 畫をばほりてぞ備へたる  
 ガ子シヤの神は智と富と  
 環と釣と手に取りて

平野の面にもゑ亘り  
 神机を置ける絨氈と  
 かゝる景色を見えたして  
 夥多の匠工打ち集ひ  
 側にものみ塔を立て  
 梁には古史を傳へたる  
 シター、ハママン、ドロバチの  
 中央に立てし玄關の  
 運び入るべき其爲に  
 象鼻を垂れて座りより



御園の面に蛭々ある  
 白薔薇色のあや浮ける  
 内門にこそいあるなれ  
 鬨は雪花石膏よ  
 繪畫の彫りそ美麗なる  
 鬱ふる亭に到るまで  
 方眼格子の廓を過ぎ  
 こゝにはおどる冷泉の  
 青黄赤白その中に  
 眼涼しく羚羊は

みちを遙かにわけ入れば  
 大理石にて築きある  
 門楣は青石もて造り  
 栴檀材の扉あり  
 さて又高き書院より  
 彩色なせる屋の下に  
 結構盡すきごはしや  
 蓮の詠め彌勝さり  
 あまゐの魚もおどるなり  
 光りかゞやくおのも巢に

咲ける薔薇を食みて居り  
 椰子の園生に遊ぶなり  
 鍍金なしある屋の椽に  
 光りまばゆき敷石の  
 静かに見やる青莊や  
 花に戯る黄色鳥  
 蜥蜴もさらに恐れなく  
 はしるもすべのどかなり  
 内氣の黒蛇も日光に  
 麝鹿も爰に遊ぶなり

霓色なせる金鳥は  
 灰色の家鳩は  
 安らなる巢を造りけり  
 上には孔雀尾を垂れて  
 樹々に飛びかふ鸚鵡鳥  
 格子に止る憶病の  
 栗鼠も餌みを得ん爲に  
 家内に福を與ふてふ  
 蟠りてず伏し居れり  
 谷の猿猴も鳶色の



眼を光らして飛び還る  
 愛の宮居はうつくしき  
 唯一として愛らしき  
 温和の言葉よるこびて  
 悦ぶへきを悦びつ  
 唯命よこれ従へり  
 流るゝ水に似て  
 知られぬまて迷はする  
 耶輸陀羅ふりと知られたれ

里の鴉と群れ遊ぶ  
 近侍のものゝ住みぬれば  
 貌と柔和の顔色と  
 働く外はほらざりき  
 樂むべきを樂みて  
 かこらぬ花を岸として  
 いつ年月のうつるとも  
 妖魔の宮の望こそ

かゝる宏大美麗なる  
 秘密の室は奥ふかく  
 心静めん其爲よ  
 空を屋根とし圍ひたる  
 大理石もて造りたる  
 同じ質ある板石を  
 階と柱のまわりには  
 毛べて彫り付けたりければ  
 歩むが如く思はるゝ  
 その壁龕よ過りつゝ

數百の室またちまさり  
 業と意匠の手段よて  
 建て設けたる入口は  
 庭の真中よ乳白の  
 大槽ありてその上よ  
 掩ひて槽の周圍また  
 瑪瑙の石の鑲箝を  
 夏尙寒く雪のうへ  
 黄金色ある日光ハ  
 暗くも見へて青白く



しるかね色の蔭とあり  
 門に至れば晝やみて  
 夕べの起るも如くあり  
 世界の一大不思議なる  
 香を放つともし火の  
 入れんが爲に設けたる  
 いと柔かよ照らしける  
 知るもの絶へてはらりき  
 日出よりも麗かよ  
 常に注ぎてあればあり

さして恰も此亭の  
 愛と静和の其中よ  
 門を打もぎうつくしき  
 室よいたれば窓よりぞ  
 唯最愛のものよみを  
 絹襦錦衣のその中よ  
 こよよ誰れも夜晝を  
 温和の光線いと清く  
 夕陽の如く柔かよ  
 甘き空気は朝よりも

尙樂みと興へつゝ  
 呼吸の如くよ快し  
 珍味の食をあらべつゝ  
 雪もて凍る飲料と  
 美肉とともよ木乳は  
 夜とあくまた晝とあく  
 舞妓常よ侍るあり  
 太子の目とばあふぎつゝ  
 花間よ響く音楽や  
 樂ましむる其中よ

そのまどしさは眞夜中の  
 夜と晝との分ちあく  
 露けき美菓とヒマラヤの  
 調理の術を盡したる  
 おのく象牙の杯よもり  
 官女は觴を行ひて  
 美姫ハ眠れる幸福の  
 また目覺めたるその時を  
 戀の歌舞もて心魂を  
 らんじやの薫りほのめきて



彼れの心はいつしかよ  
傍へよねむるそれまでよ  
思ひを忘れ住み玉ふ

彼のうつくしき耶輸陀羅の  
悉達太子はもろくの

また其上の大王は  
老死哀悼疾病を  
爰の殿居の其中よ  
其足よろめく事あらば  
この樂土より逐ひ放ち  
見て悲むを防ぎたり

凡べて廓の内よてハ  
語るを禁じ玉ひけり  
もし眼くるめき踏るうち  
つみよあらざる罪を得て  
太子の彼れががしみを  
飢饉疫病憂苦の有様も

死よ泣く人のがしみも  
とべて此等の不吉なる  
かたらふものありもせば  
直よ罪を正すかり  
歌舞を奏する舞姫の  
謀叛とさして刑へり  
摘みとてられて枯る葉も  
残らず取りぞ除かれき  
もし彼れよして幼年よ  
術なく暮らすそのうちは

茶毘の烟りのものすごき  
外界の事をしごとくと  
眼とるどき従卒は  
もし一線の白髪  
その練毛よあるふれば  
萎る薔薇は朝ごとよ  
共よかくされ凶兆は  
大王常よ云ひけらく  
思案執念起とべき  
人よ不相應ぬ命運の



影もおそらく羨み得て  
治めん時に立派ある  
もし彼れよして世よ立たば  
我れも榮ある王代を見ん

彼れが率士の濱までも  
王とあらんを見るべきが  
王の王ふり世のほまれ

されば愛をば獄吏とし  
ふせしハ人の目よふれず  
めぐりよ王は大壁を  
その壁門は青銅の  
之を開くよ百人の

和樂を以て鐵條と  
かゝる樂しき牢獄の  
命じて築き建て玉ふ  
おもき扉をとごしたり  
兵を要むと云ひ傳ふ

開く響きの聞ゆるは  
この門内よまた一つ  
この樂殿を出んよは  
通らぬ事ハかりがたし  
いと堅固よ鎖閉して  
番兵をこそおきよけれ  
誰人よても此門を  
たとひ太子よあればとて  
よし我子よてあればとて

半踰繕那よ達をべし  
また其内よ門ありて  
必らず三重の門戸をば  
此等の三の大門は  
上よハ忠義老實の  
かくして王ハ命じたり  
過ぎ行くことを許さぐれ  
命よかへて守るべし



明治二十三年四月十六日印刷  
明治二十三年四月十八日出版

定價金十八錢

著作者

山口縣士族

中川太郎

京都市下京區若宮通花屋町南入  
西本松町第四番戶寄留

發行者

福岡縣平民

神代洞通

京都市油小路北小路上ル玉本町  
五番戶寄留

印刷者

兵庫縣平民

清水精一郎

京都市油小路北小路上ル玉本町  
六番戶寄留

版權登錄

發行所  
賣捌所

京都市油小路北小路上ル

東京市本郷區本郷四丁目

興教書院  
哲學書院

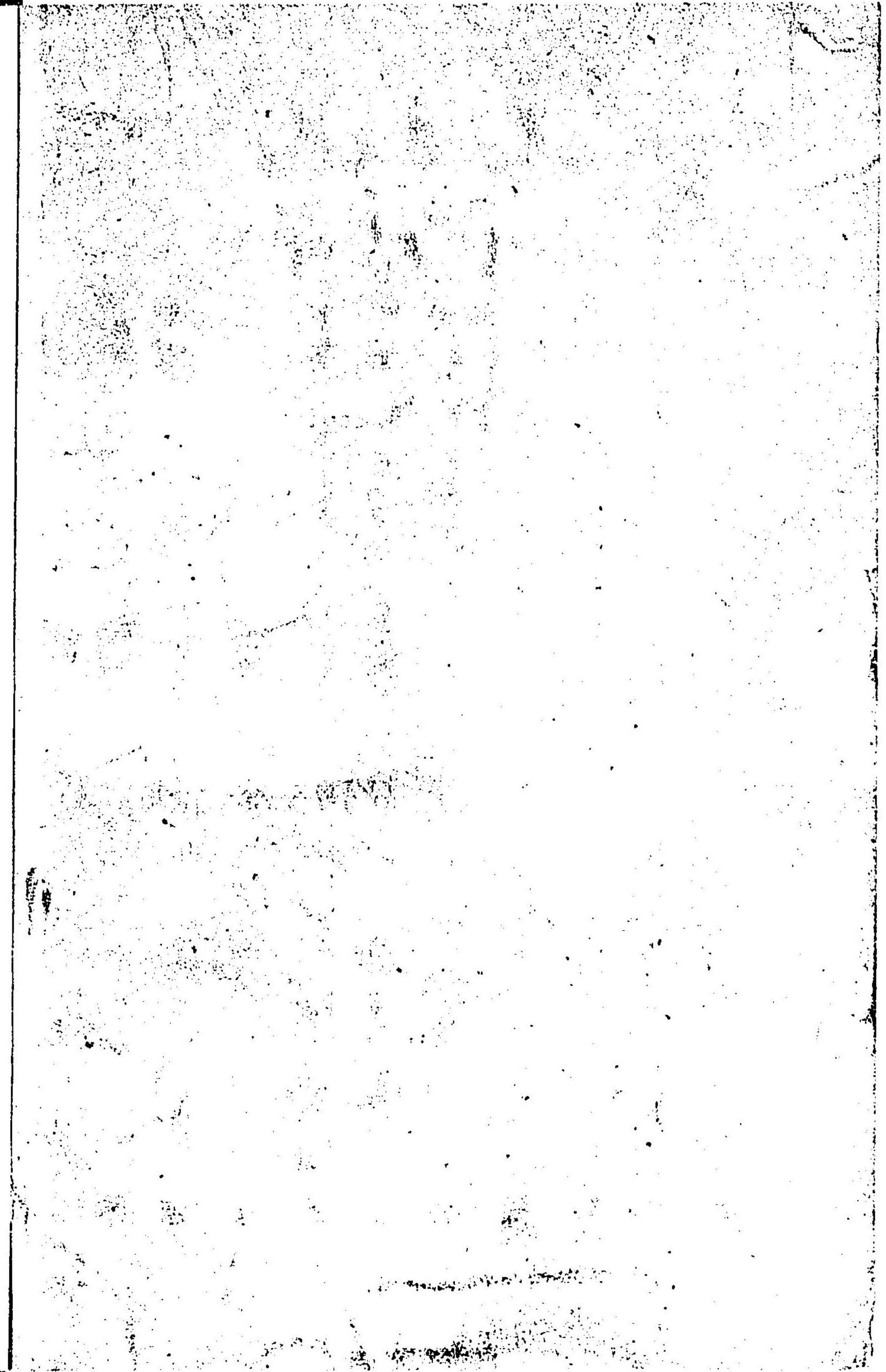


# 大 賣 捌 所

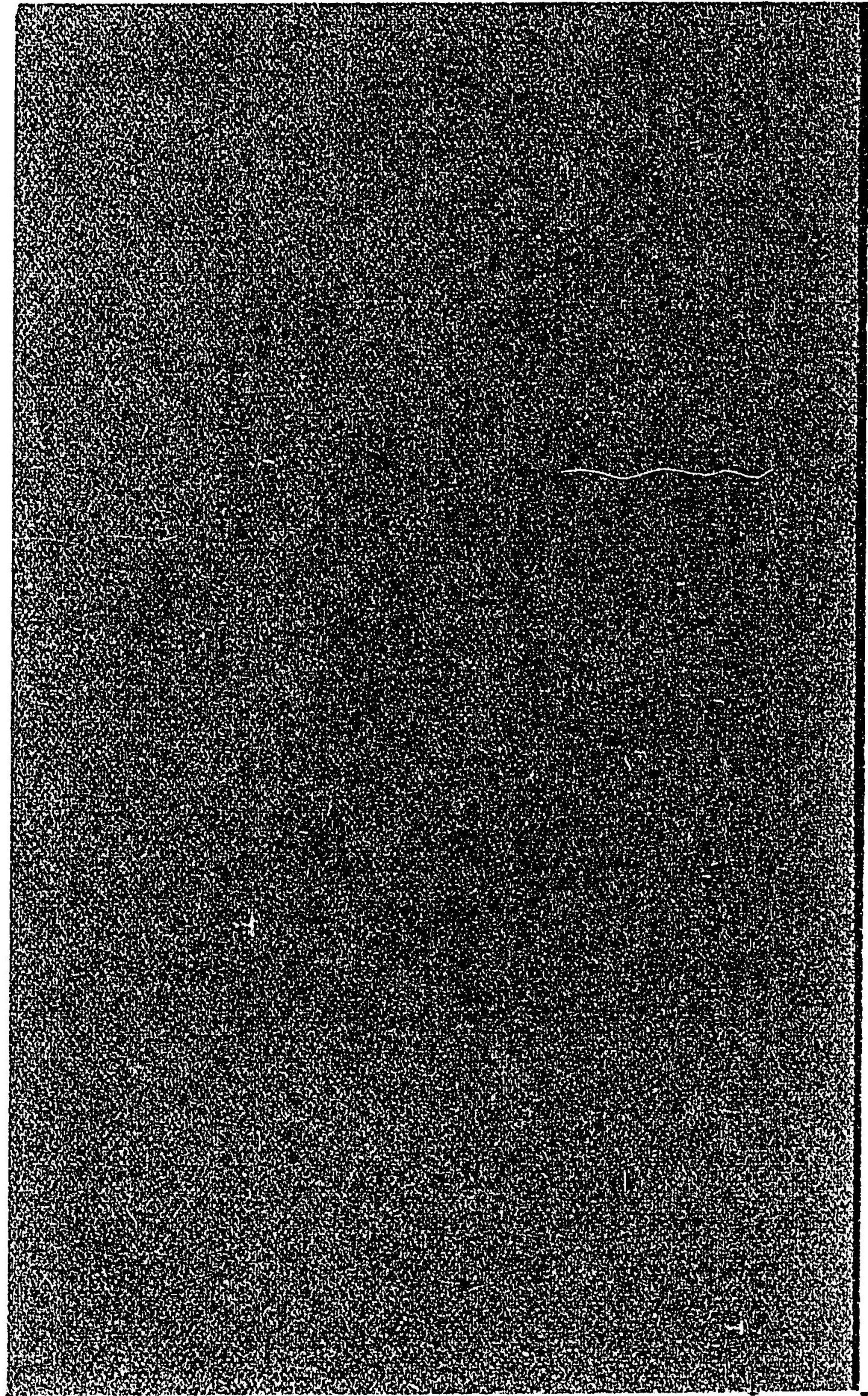
東京市日本橋區久松町一番地	開導書院
同 京橋區三十間堀	明教社
大阪市心齋橋通北久寶寺町	丸善書店
同 心齋橋筋二丁目	松村九兵衛
名古屋市門前町十七番戶	三浦其中堂
廣嶋市橋本町	末田恕之助
京都市東中筋花屋町東入	永田長兵衛
同 三條高倉東入	出雲寺文次郎
同 五條高倉東入	澤田友五郎
同 東六條中珠敷町	西村七兵衛
同 油小路花屋町上ル	松田書店
越中國富山市上立町	福田清明堂

(印刷所 大阪市東區北久太郎町二丁目 大阪活版製造所)

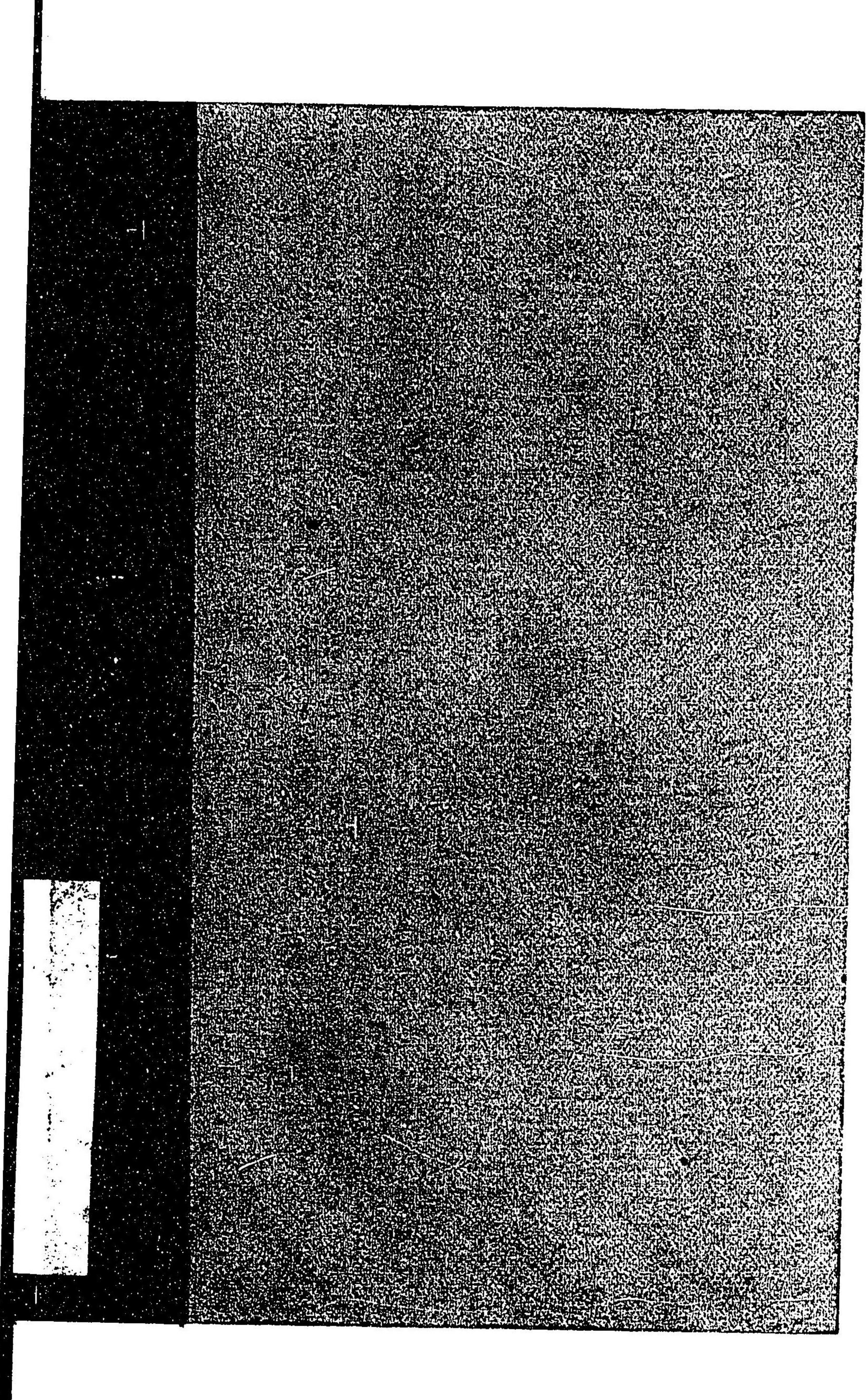














特47

299

亞細亞之光輝

第1卷

国立国会図書館

100777-000-9

特47-299

亞細亞之光輝 第1篇

エドウィン・アーノルド/著

M23

DBY-0010





